

入学試験問題 国語

一

次の①～⑤の―線部の漢字には読み仮名をつけ、⑥～⑩の―線部の仮名は漢字に直して書きなさい。必要に応じて送り仮名もつけなさい。

- | | |
|-----------------|----------------|
| ① 沿岸漁業がさかなな地方。 | ② 彼は今、公私共に多忙だ。 |
| ③ 不満分子を除く。 | ④ ちよつと拝借します。 |
| ⑤ 生卵をといてご飯にかける。 | ⑥ カカクを自由に決める。 |
| ⑦ 今日は「ボウサイの日」だ。 | ⑧ 女王が国をおさめる。 |
| ⑨ チームをひきいて合宿する。 | ⑩ 作者のリヤクレキを読む。 |

二

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

① ねえちゃんがいなくなった最初の日曜日、お昼から、かあちゃんととうちゃんとぼくは、竹三さんのうちの稲刈りを手伝いにいった。

「まあまあ、すまんのう」

と、竹三さんのおくさんはいった。

「こちらこそ、いつもいつもお世話になっています」

と、とうちゃんはいって、かあちゃんと二人でおじぎをした。

「せっかくの日曜日やというのにすまんことやの」

竹三さんのおくさんは、ぼくにも礼をいってくれた。

田舎の人はいいいな。

「このごろは田舎の子でも、家の仕事は手伝わんのによ。えらいよの、タカぼうは」

② 竹三さんのおくさんはぼくをほめてくれた。

「ま、肩をこらさんように、ぼちぼちやってくれよ」

と竹三さんは笑いながらいった。

ねえちゃんが家出をしたことは、竹三さんもおくさんも知っていて、二人はぼくらをかばうようにねえちゃんのことを話題に出さなかった。

竹三さんの田は海が大きく見える山の中腹にあった。

④黄金色の稲の穂がよく熟れていつせいにおじぎをしていた。

青い海を背に赤トンボがのんきそうに飛んでいた。

「去年は冷害で、七分のできやった。ことしは豊年やのう」

と竹三さんはいった。

「このへんを刈ってもらおうかいの」

と竹三さんのおくさんはいった。

稲刈りといっても、このごろは機械がやってしまう。でも、ここは山村で、田が曲がりくねった段々畑が多いから、機械が入らなくて一株ずつ人の手で刈りとっていくところもたくさんある。

とうちゃんもかあちゃんも鼻の頭に汗をかいて、ぎっくぎっく稲を刈っている。

そう書くとカッコいいみたいやけど、その横に竹三さんのおくさんがいて、すごいスピードで稲を刈っていくから、とうちゃんやかあちゃんの仕事は、その横で子どもが遊んでいるみたいに見える。

けど、そらしようがないな。

「タカぼう。稲をそう持ったらいかん。そうつかんだら、逆手になつて鎌で手を切る」

竹三さんのおくさんはあわてたようにいって、ぼくの手をなおしてくれた。

親指を下にして稲束をにぎっていたのを、親指が上になるようにしてにぎる。そうして刈ると、はじめはへんな感じだったけど、すぐなれて、その方がしげんで、早く刈れるようになった。

「ふーん、なるほど、そうか」

とうちゃんはぼくのようにすを見ていて感心したようにいった。

「みんな逆手で刈っていたのかいな。はじめにそれをいっておかなかったわたしが悪いけど、あぶないことよな」

と竹三さんのおくさんはいった。

⑤稲刈りひとつするのにも、勉強がいるのやなど、ぼくは思った。

学校の授業は、勉強のごく一部分と、とうちゃんがよくいうけれど、ここで暮らしはじめてから、とうちゃんのいうことがわかる。

虫とりも野菜づくりもやまいも掘りも、みんな勉強がいる。

その勉強は、飲どんや風太も簡単に優等生になれる勉強やからいい。

そんなことを思っていたら、もうひとつ、⑥大きな勉強がぼくたちを待っていた。

* (中略)

ぼくはそのとき、きつと青い顔をしていたと思う。自然の勉強つてたのしいことばかりやない。きびしいなあとぼくは思った。

「少し一服せんかいの」

竹三さんのおくさんがぼくたちをなぐさめるようにいって、よく冷えたカン入りコーヒーを持ってきてくれた。

コーヒーを飲みながら竹三さんが話してくれた。

「どういうわけか人間は長いものを見ると気味悪がる。へビは人間の嫌われものだが、気味が悪いからといって、害もくわえないのに、いじめたり殺したりすることはだれにも許されておらん。自然の生き物は生きていくためにどうしても必要なときだけ、ほかのいのちをもらって、そうして生きている。タカぼう、おっちゃんは平気でへビを殺しているのやないぞ」

「うん」

ぼくはうなずいた。

⑦そう話す竹三さんはえらい先生みたいやった。

それから、草むらの近くの稲を刈るときは、先に安全をたしかめてから刈っていった。

稲を刈りながらぼくは思った。

「ごはんを食べるとき、お米をつくった人の苦労などだれも考えない。今までお金はなんでも買えて便利なもんやと思っていただけ、お金は人の苦労まで買ってしまふ。」

「アタタ」

と、とうちゃんが悲鳴をあげた。

背のびをしようとして腰をのびた拍子に痛くなつたらしい。

「とうさん。どうしました？」

とかあちゃんも立ちあがりかけて、

「アタタ」

と、とうちゃんと同じように、悲鳴をあげた。

「なれんと腰が痛いもんよ」

竹三さんのおくさんは笑いながらいった。

ぼくは平気や。

「えらいよの、タカぼうは」

ぼくはまた、竹三さんのおくさんにほめられた。

とうちゃんとかあちゃんは、それから十分おきくらいに腰をのびしては、

「アタタ」

「アタタ」

をくりかえしていた。

竹三さんは田のまん中に、稲掛けをつくった。

「長い時間の稲刈りは、はじめてのもんにはきついわな。稲束を稲掛けにかけておくれ」

竹三さんはとうちゃんとかあちゃんに助け船を出した。

「はいはい」

とうちゃんはとてもいい返事をして、びよんびよんと飛ぶようにして稲掛けのところへ行った。

「とうちゃん」

ぼくは大声でとうちゃんを叱ってやった。

もうしょうがないね、とうちゃんは。

「タカぼうもあっちの方の仕事を手伝ってきたら」

と竹三さんのおくさんがいったけど、ぼくはとうちゃんのように弱虫ともちがうところを見せんといかんから、

「いいからいいから」

といって稲刈りをつづけた。

「えらいよの、タカぼうは」

竹三さんのおくさんはまた、ぼくをほめた。

広い田がとうとう丸ぼうずになってしもた。

⑩世界が広くなったような気がした。ぼくはひとつ深呼吸をした。

いい気持ちや。

こんな気分、飲どんや風太らに味わわせてやりたいなとぼくは思った。

それから、家出をしたねえちゃんはひとつ損したと思った。

考えるのは勝手やけど、考えるだけではたくさんのことを知ることはできないし、だいいち、こんないい気分になれへんもんな。こうしてきょうを力いっぱい生きたら、もうそいつはぼんとけとばして、また、あしたや。

(灰谷健次郎「島物語」より)

問一 ― ①「ねえちゃんがなくなった」とありますが、どうしたのですか。本文中から五字で書きぬきなさい。

問二 ― ②「竹三さんのおくさんはぼくをほめてくれた」とありますが、このあと「ぼく」は二回、竹三さんのおくさんにほめられます。― ②でほめられた理由は、「このごろは田舎の子でも家の仕事は手伝わないので、都会から来たタカぼうが仕事を手伝ってくれているから」という答えになります。二回目、三回目にほめられた理由を、「」のに、から」という形で答えなさい。

問三 ― ③「黄金色の稲の穂がよく熟れていっせいにおじぎをしていた」とありますが、ここで使われている表現技法を次のア～オから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 擬音語 イ 擬態語 ウ 擬人法 エ 反復法 オ 体言止め

問四 ― ④「稲刈りひとつするのにも、勉強がいるのやなど、ぼくは思った」とありますが、この場合、「ぼく」は具体的にどういうことを学んだのですか。本文中の言葉を使って説明しなさい。

問五 ― ⑤「大きな勉強」とありますが、* (中略) の場面でのどのような出来事があったと想像できますか。次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 稲刈りの最中に田にへびが現れたが、毒を持っているへびだったので、危険と判断した竹三さんが殺してしまった。
イ 稲刈りの最中に田にへびが現れたが、毒を持っていないへびだったので、安全と判断した竹三さんが逃がしてあげた。
ウ 稲刈りの最中に田にへびが現れたが、「ぼく」がむやみに殺そうとしたので、竹三さんが「ぼく」をしかった。
エ 稲刈りの最中に田にへびが現れたが、「ぼく」の父親が「ぼく」を置いて逃げたので、「ぼく」はがっかりした。

問六 ― ⑥「そう話す竹三さんはえらい先生みたいやった」とありますが、この出来事を通して「ぼく」はどういう考えを持ちましたか。それがわかる一文を本文中から探し、その最初の五字を書きぬきなさい。

問七 ― ⑦「世界が広くなったような気がした」とありますが、稲刈りでの出来事とおして、「ぼく」はどのようなことを学び、成長しましたか。詳しく説明しなさい。

問八 主人公「ぼく(タカぼう)」はどういう少年ですか。その説明としてあてはまるものを次のア～カから二つ選び、記号で答えなさい。

ア 都会から島にやってきたが、不便な生活にがまんできず、島から逃げたいと考えている。
イ 都会から島にやってきたが、すぐに島の自然や生活にも慣れ、楽しんで暮らしている。
ウ 島に連れてこられた反発で、父や母に対して冷たい態度で接し、ばかにしている。
エ 島に連れてこられた反発で、島の動植物を乱暴に扱い、島の人にいられている。
オ 島からいなくなった姉のことが大きらいとなり、考えたくもないと思っている。
カ 島からいなくなった姉のことを勝手だと思いつつ、どうしているか心配している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

きみは便利ということばで何を思い出す？ 高速道路、携帯電話、コンビニ、自動販売機、全自動の炊飯器や風呂、コンピュータ、インターネット……。便利はまさに現代社会のキーワードだ。便利のすばらしさに疑いを差しはさむ人は変わり者といわれ、ひどい時には仲間はずれにされる。便利のためには相当の犠牲が伴っても人々は平気だ。自動車という便利のためには、毎年世界で八十八万人の人が交通事故で死んだり、もつとずっと多くの人が排気ガスによる空気汚染で病死したりすることもたいして気にならない。自動車を走らせるための石油をめぐって戦争が起きたり、道路をつくるために貴重な自然が壊されたりしても、平気でいる人がほとんどだ。どうやら、便利は一種の宗教らしい。人々はそれをあがめ、その前にひれ伏す。自動ドアをもつ家をつくる業者がいて、そういう家で子どもを育てたいと思う人がいる。(①)だからだ。液晶を使って「一年中楽しめる」人工ホテルを発明する科学者がいて、それを買う人がいる。(①)だからだ。日本には今、四万店をこえるコンビニ(便利を意味するコンビニエンスという英語から来た名前)と、五百五十万台の自販機がいつ来るともしれない気まぐれな客を待って、夜を明るくしてくれている。ああ、なんとこの便利な世の中だろう！

② 便利教という宗教のこわさについて、もうきみは十分知っていると思う。便利の裏側にはいつもいろんな不便がくっついてくるといふことも。公害も環境破壊も、便利教が引き起こした大きな不便だということ。ぼくたち人間は便利を手に入れるために、他人に迷惑をかけるばかりか、自分自身が生きていくための土台さえ平気で掘りくずしてきたのだということを。

それだけではない。便利はぼくたち自身の能力を低下させたり、心やからだの健康に害を与えたり、生きる楽しさを取りあげたりすることもあるのだ。(③)「車のせいでぼくたちの歩く能力は衰え、肥満などの健康上の問題が増え、散歩の楽しみが減る、というふうに。」

「楽」という漢字には大きく分けてふたつの意味がある。ひとつは楽しいとか快楽とかの「楽」。もうひとつは便利とか簡単を意味する「楽」。「楽しいこと」と「楽なこと」。このふたつを混同し、まるで同じことを意味しているかのように思いこむのは危険なことだ。少し考えればわかるように、楽なことが楽しいとは限らない。便利で楽なことがかえってぼくたちの楽しさをうばってしまうこともある。(⑤)「楽しいことが、難しかったり、複雑だったり、面倒だったり、時間がかかったりすることはよくある。そればかりか、難しく、面倒で、時間がかかるからこそ、楽しい、ということも珍しくない。」

(⑦)「ぼくたちはやっぱり、「楽しいこと」を「楽なこと」から区別しておいたほうがいい。ファストな「楽」を手に入れるために、スローな楽しさや気持ちよさを犠牲にしないようにしよう。そう考えるのがアウトドアという遊びだ。それは、楽で便利なことのかわりに不便で時間のかかるスローな楽しさをぼくたちに与えてくれる。」

(辻信一『ゆっくり』でいいんだよ)より

問一 (①)に共通して入る言葉を本文中から書きぬきなさい。

問二 ②「便利教という宗教のこわさ」とありますが、筆者が特に強調している「こわさ」とは何ですか。それが的確に書かれている一文を探し、その最初の五文字を書きなさい。

問三 ④「ふたつの意味」とありますが、その意味が書かれているところを、本文中からそれぞれ十字以上十五字以内で書きぬきなさい。

問四 ⑥「難しく、複雑で、面倒で、時間がかかるからこそ、楽しい」とありますが、その具体的な例として何が取り上げられていますか。本文中から十字で書きぬきなさい。

問五 (③・⑤・⑦)にあてはまる言葉を、後のア～エから一つずつ選び、記号で答えなさい。

アそして イだから ウしかし エたとえば

問六 『楽しいこと』を『楽なこと』から区別しておいたほうがいい」という筆者の意見に対するあなたの意見を、あなたの体験もふくめて書きなさい。ただし字数は百六十字以上、二百字以内とします。

